

寺泊御書

文永八年一〇月二二日 五〇歳

今月^{なり}十月十日、相州^{あいこう}愛^え京^{ちのごう}郡^た依^{むさしのくに}智^く郷^{めがわ}を起^{しゆく}つて、武^{むさしのくに}蔵^く国^{めがわ}久^{しゆく}目^{しゆく}河^{しゆく}の宿^{しゆく}に付き、十二日を経^{しゆく}て越^{えちごのくに}後^{てら}国^{どまり}寺^{えちごのくに}泊^{てら}の津^{えちごのくに}に付きぬ。此より大海を巨^{さどのくに}つて佐^さ渡^だ国^{くに}に至^ならんと欲^{ほか}す。順^な風^な定^なまら^なず、其^なの期^なを知ら^なず。道^なの間^なの事^な、心^なも及^なぶこと莫^なく、又^な筆^なにも及^なばず。但^な暗^なに推^なし度^なるべし。又^な本^なより存^な知^なの上^ななれば、始^なめて歎^なくべきに非^なざれば之^なを止^なむ。

法華經第四に云はく「而も此の經は如来の現在すら猶^な怨^な嫉^な多^なし。況^なんや滅^な度の後^なをや」と。第五の巻に云はく「一切^{あた}世^{あた}間^{あた}怨^{あた}多^{あた}くして信^{あた}じ難^{あた}し」と。涅槃經三十八に云はく「爾^{ねはん}の時^{ねはん}一切^{ねはん}の外^{ねはん}道^{ねはん}の衆^{ねはん}咸^{ねはん}く是^{ねはん}の言^{ねはん}を作^{ねはん}さく、大^な王^な今^い者^ま唯^ひ一^との大^く悪^{どん}人^{どん}有^くり、瞿^く曇^{どん}沙^く門^{どん}なり一切^も世^も間^もの悪^も人^も、利^も養^もの為^もの故^もに其^もの所^もに往^もき集^もまりて、而も眷^も属^もと為^もつて善^もを修^もすること能^もはず。呪^も術^も力^もの故^もに迦^も葉^も及^もび舍^も利^も弗^も・目^も犍^も連^も等^もを調^も伏^もす」云云。此の涅槃經の文は、一切^もの外^も道^もが我^もが本^も師^もたる二^も天^も・三^も仙^もの所^も説^もの經^も典^もを、仏^も陀^もに毀^もられて出^もだす所^もの悪^も言^もなり。法華經の文は、仏^もを怨^もと為^もす經^も文^もには非^もず。天台の意^もに云はく「一切^{しやうもん}の聲^{えんがく}聞^{えんがく}・縁^{えんがく}覺^{えんがく}並^{えんがく}びに近^{えんがく}成^{えんがく}を樂^{えんがく}ぶ菩^{えんがく}薩^{えんがく}」等云云。聞^{えんがく}かんと欲^{えんがく}せず、信^{えんがく}ぜん^{えんがく}と欲^{えんがく}せず、其^{えんがく}の機^{えんがく}に当^{えんがく}たらざるは、言^{えんがく}を出^{えんがく}だして謗^{えんがく}ること莫^{えんがく}きも、皆^{えんがく}怨^{えんがく}嫉^{えんがく}の者^{えんがく}と定^{えんがく}め了^{えんがく}んぬ。在^{えんがく}世^{えんがく}を以^{えんがく}て滅^{えんがく}後^{えんがく}を惟^{えんがく}ふに、一切^{えんがく}諸^{えんがく}宗^{えんがく}の学^{えんがく}者^{えんがく}等^{えんがく}は皆^{えんがく}外^{えんがく}道^{えんがく}の如^{えんがく}し。彼^{えんがく}等^{えんがく}が云^{えんがく}ふ一^{えんがく}大^{えんがく}悪^{えんがく}人^{えんがく}とは日^{えんがく}蓮^{えんがく}に当^{えんがく}たれり。一切^{えんがく}の悪^{えんがく}人^{えんがく}之^{えんがく}に集^{えんがく}まるとは、日^{えんがく}蓮^{えんがく}が弟^{えんがく}子^{えんがく}等^{えんがく}是^{えんがく}なり。彼^{えんがく}の外^{えんがく}道^{えんがく}は先^{えんがく}仏^{えんがく}の説^{えんがく}教^{えんがく}流^{えんがく}伝^{えんがく}の後^{えんがく}、之^{えんがく}を謬^{えんがく}つて後^{えんがく}仏^{えんがく}を怨^{えんがく}と為^{えんがく}せり。今^{えんがく}諸^{えんがく}宗^{えんがく}の学^{えんがく}者^{えんがく}等^{えんがく}も亦^{えんがく}復^{えんがく}是^{えんがく}くの如^{えんがく}し。所^{えんがく}詮^{えんがく}仏^{えんがく}教^{えんがく}に依^{えんがく}つて邪^{えんがく}見^{えんがく}を起^{えんがく}こす。目^{えんがく}の転^{えんがく}ずる者^{えんがく}、大^{えんがく}山^{えんがく}転^{えんがく}ずと欲^{えんがく}ふ。今^{えんがく}八^{えんがく}宗^{えんがく}・十^{えんがく}宗^{えんがく}等^{えんがく}、多^{えんがく}門^{えんがく}の故^{えんがく}に諍^{えんがく}論^{えんがく}を致^{えんがく}す。

涅槃經第十八に「贖^{ぞく}命^{みょう}重^{じゅう}宝^{ほう}」と申^{ぞく}す法^{ぞく}門^{みょう}あり。天台大師^{りょうけん}の料^{りょう}簡^{けん}に云はく「命^{りょう}とは法^{りょう}華^{けん}經^{けん}なり。重^{りょう}宝^{けん}とは涅槃^{りょう}經^{けん}に説^{りょう}く所^{けん}の前^{けん}三^{けん}經^{けん}なり」と。但^{りょう}し涅槃^{けん}經^{けん}に説^{りょう}く所^{けん}の円^{けん}教^{けん}は如何^{けん}。此^{りょう}の法^{けん}華^{けん}經^{けん}に説^{りょう}く所^{けん}の仏^{けん}性^{けん}常^{けん}住^{けん}を、重^{りょう}ねて之^{けん}を説^{りょう}いて歸^{けん}本^{けん}せしめ、涅槃^{りょう}經^{けん}の円^{けん}常^{けん}を以^{りょう}て法^{けん}華^{けん}經^{けん}に撰^{りょう}す。涅槃^{りょう}經^{けん}の得^{りょう}分^{けん}は但^{りょう}前^{けん}三^{けん}教^{けん}に限^{りょう}る。天台^{りょう}の玄^{けん}義^{けん}の三^{けん}に云はく「涅槃^{りょう}は贖^{けん}命^{けん}の重^{けん}宝^{けん}なり。重^{りょう}ねて掌^{けん}を抵^{けん}つのみ」文^{けん}。籤^{けん}の三^{けん}に云はく「今^{けん}家^{けん}の引^{けん}く意^{けん}は、大^{けん}經^{けん}の部^{けん}を指^{けん}して以^{けん}て重^{けん}宝^{けん}と為^{けん}す」等云云。天台^{りょう}大師^{けん}の四^{けん}念^{けん}処^{けん}と申^{りょう}す文^{けん}に、法^{りょう}華^{けん}經^{けん}の「雖^{すい}示^{すい}種^{すい}種^{すい}道^{すい}」の文^{すい}を引^{すい}いて、先^{すい}四^{すい}味^{すい}を又^{すい}重^{すい}宝^{すい}と定^{すい}め了^{すい}んぬ。若^{すい}し爾^{すい}らば法^{すい}華^{すい}經^{すい}の先^{すい}後^{すい}の諸^{すい}經^{すい}は法^{すい}華^{すい}經^{すい}の為^{すい}の重^{すい}宝^{すい}なり。世^{すい}間^{すい}の学^{すい}者^{すい}の想^{すい}はくに云はく「此^{すい}は天台^{すい}一^{すい}宗^{すい}の義^{すい}なり。諸^{すい}宗^{すい}には之^{すい}を用^{すい}ひず」等云云。

日^{りょう}蓮^{けん}之^{けん}を案^{りょう}じて云はく、八^{りょう}宗^{けん}・十^{けん}宗^{けん}等^{けん}、皆^{りょう}仏^{けん}滅^{けん}後^{けん}より之^{りょう}を起^{けん}こし、論^{りょう}師^{けん}・人^{けん}師^{けん}之^{りょう}を立^{けん}つ。滅^{りょう}後^{けん}の宗^{けん}を以^{りょう}て現^{けん}在^{けん}の經^{けん}を計^{りょう}るべからず。天台^{りょう}の所^{けん}判^{けん}は、一切^{りょう}經^{けん}に叶^{けん}ふに依^{りょう}つて一^{けん}宗^{けん}に属^{りょう}して之^{けん}を棄^{けん}つべからず。諸^{りょう}宗^{けん}の学^{けん}者^{けん}等^{けん}、自^{りょう}師^{けん}の誤^{けん}りを執^{りょう}する故^{けん}に、或^{けん}は事^{けん}を機^{りょう}に寄^{けん}せ、或^{けん}は前^{けん}師^{けん}に譲^{りょう}り、或^{けん}は賢^{けん}王^{けん}を語^{りょう}らひ、結^{けん}句^{けん}最^{りょう}後^{けん}には悪^{けん}心^{けん}強^{りょう}盛^{けん}にして鬪^{けん}争^{けん}を起^{りょう}こし、失^{けん}無^{けん}き者^{けん}を之^{りょう}を損^{けん}なふて樂^{けん}しみと為^{りょう}す。諸^{けん}宗^{けん}の中^{けん}に真^{けん}言^{けん}宗^{けん}殊^{けん}に僻^{けん}案^{けん}を至^{りょう}す。善^{けん}

無畏・金剛智等の想はくに云はく「一念三千は天台の極理、一代の肝心なり。顯密二道の詮たるべきの心地の三千をば、且く之を置く。此の外、印と真言とは仏教の最要」等云云。其の後真言師等、事を此の義に寄せて印・真言無き経々をば之を下すこと外道の法の如し。或義に云はく「大日経は釈迦如来の外の説なり」と。或義に云はく「教主釈尊第一の説なり」と。或義に「釈尊と現じて顯教を説き、大日と現じて密教を説く」と。道理を得ずして、無尽の僻見之を起こす。譬へば乳の色を弁へざる者、種々の邪推を作せども、本色に当たらずるが如し。又象の譬への如し。今汝等知るべし、大日経等は法華経已前ならば華嚴経等の如く、已後ならば涅槃経等の如し。又天竺の法華経には印・真言有れども、訳者之を略して羅什は妙法経と名づけ、印・真言を加へて善無畏は大日経と名づくるか。譬へば正法華・添品法華・法華三昧・薩云分陀利等の如し。仏の滅後、天竺に於て此の詮を得たるは竜樹菩薩、漢土に於て始めて之を得たるは天台智者大師なり。真言宗の善無畏等、華嚴宗の澄観等、三論宗の嘉祥等、法相宗の慈恩等、名は自宗に依れども其の心は天台宗に落ちたり。其の門弟等此の事を知らず、如何ぞ謗法の失を免れんや。

或人日蓮を難じて云はく、機を知らずして龐義を立て難に値ふと。或人云はく勸持品の如きは深位の菩薩の義なり。安樂行品に違すと。或人云はく、我も此の義を存ずれども言はず」云云。或人云はく、唯教門計りなり、理は具に我之を存ずと。卞和は足を切られ、清丸は穢丸と云ふ名を給ひて死罪に及ばんと欲す。時の人之を咲ふ。然りと雖も其の人未だ善き名を流さず。汝等が邪難も亦爾るべし。勸持品に云はく「諸の無智の人有りて、悪口罵詈す」等云云。日蓮此の経文に当たれり。汝等何ぞ此の経文に入らざる。「及び刀杖を加ふる者」等云云。日蓮此の経文を読み。汝等何ぞ此の経文を読まざる。「常に大衆の中に在って、我等の過を毀らんと欲す」等云云。「国王・大臣・婆羅門・居士に向かつて」等云云。「悪口して鬻鬻し、数々擯出せられん」と。数々とは度々なり。日蓮が擯出は衆度、流罪は二度なり。法華経は三世説法の儀式なり。過去の不輕品は今の勸持品、今の勸持品は過去の不輕品なり。今の勸持品は未来に不輕品たるべし。其の時は日蓮は即ち不輕菩薩たるべし。一部八巻・二十八品、天竺の御経は一須臾に布くと承る。定めて数品有るべし。今漢土・日本の二十八品は、略の中の要なり。正宗は之を置く。流通に至って宝塔品の三箇の勅宣は、靈山・虚空の大衆に被らしむ。勸持品の二万・八万・八十万億等の大菩薩の御誓言は、日蓮が浅智に及ばず。但し「恐怖悪世中」の経文は末法の始めを指すなり。此の「恐怖悪世中」の次下の安樂行品等に云はく「於末世」等云云。同本異訳の正法華経に云はく「然後末世」と。又云はく「然後来末世」と。添品法華経に云はく「恐怖悪世中」等云云。当時、当世三類の敵人之有るに、但八十万億那由他の諸菩薩は一人も見へたまはざるは、乾たる潮の満たず、月の虧けて満ちざるが如し。水清めば月を浮かべ、木を植ゆれば鳥棲む。日蓮は八十万億那由他の諸の菩薩の代官として之を申す。彼の諸の菩薩の加被を請くる者なり。

此の入道、佐渡国^{さどくに}へ御供為すべきの由之を承り申す。然るべけれども用途と云ひ、か
たがた^{わずら}煩ひ有るの故に之を還す。御志始めて之を申すに及ばず。人々に是くの如くに
申させ給へ。但し^{れいそう}囚僧等のみ心に懸かり候。便宜の時早々之を聴かすべし。穴賢穴賢。

十月廿二日^{とりのとき}酉時

日 蓮 花 押

土 木 殿